2010. June　初夏　vol. 2

会報 安曇人

安曇誕生の系譜を探る会

CONTENTS

1 第３回現地勉強会 穂高地域の古墳を巡る
2 安曇族ゆかりの地との交流を広げよう …… 金井 恂
いつから“安曇野”と呼ばれたか …… 本郷 敏行
3 第4回総会報告・第10回勉強会 他
4・5 安曇氏と信濃国安曇部氏（史料にみる安曇） …… 浅川 隆
6 安曇誕生の系譜を探る会に参加して …… 宗像 章
安曇野こぼれ話―② …… 細川 修
7 志賀海神社 山ほめ祭から阿曇族を考える …… 米倉 忠平
志賀島の金印は何と読むか … 志賀島歴史シンポ 大谷名誉教授の新説
8 安曇の歴史と穂高神社―① …… 山崎 佐喜治
編集後記「安曇人」について一言 …… 本郷 敏行

発行：安曇誕生の系譜を探る会 〒399-8101 長野県安曇野市三郷明盛1078-1 Tel.0263-77-2803　発行責任者：金井恂

▲上原古墳（穂高）撮影：小松 宏彰

第３回 現地勉強会　穂高地域の古墳を巡る …… 平成22年1月31日

1月31日、「穂高地域の古墳を巡る」をテーマに山下泰永さん（長野県考古学会員）を講師に、第３回現地勉強会を58人の参加で開催。

中房川古墳群A-1号墳「陵塚」～魏石鬼窟D-1号墳「魏磯城窟」～穂高郷土資料館～天満沢古墳群B-1号墳「ぢいが塚」～上原G-1号墳「上原古墳」を巡り、安曇野の古墳時代を学びました。

■穂高地域のにおける古墳時代の遺跡の様相

古墳時代前期：前期古墳は発見されていない。住居址は、矢原遺跡群五輪畑遺跡、耳塚遺跡など点在的な小さなムラ。土器は在地のものの他、東海、北陸、畿内の影響あり。

古墳時代中期：中期古墳は発見されていないが、可能性は（耳塚大塚様）？住居址は、矢原遺跡群五輪畑遺跡、馬場街道遺跡など。前期同様、点在的な小さなムラ。土器は在地のものの他、畿内の影響あり。

古墳時代後期：住居址は６世紀後半ごろ扇状地扇端の段丘上、微高地に集落として拡大。東部の宮地遺跡・巾上遺跡から始まり、西に移りながら、矢原遺跡群全域に。７世紀になると、藤塚遺跡、北才の神遺跡にも集落域を伸ばす。かわって巾上遺跡などは、水田域に変化していく。後期古墳は、西山山麓の沢筋中心に分布。一部平地も。

■穂高地域における古墳（群集墳・単独墳）の分布

A　群：宮城山麓の油川沿いに分布。
B　群：有明天満沢沿いに分布。
C　群：有明富士尾沢沿いに分布。
D古墳：魏石鬼窟古墳（単独墳）
E　群：牧地区に分布する古墳
F　群：塚原地区に分布する古墳
G古墳：上原古墳（単独墳）
H古墳：耳塚大塚様（古墳？）

安曇族ゆかりの地との交流を広げよう ……金井 恂

「安曇人」第2号発刊は私たちの会が活発に活動していることの表われであり、大変喜ばしいことです。「安曇人」は会員の意見発表の場であり、そして外部への情報発信の場です。会の中だけでの討論に終わらず、外部の人たちにも聞いてもらい、そして外部からの意見も受け入れることができます。会の活動を活性化させ充実させていく上で非常に有効かつ重要な手段です。私たちの会は門前の小僧と素人の集まりとみなすことにしています。それは、自分の知識不足を気にせずにどんどん積極的に質問したり意見発表したりするためです。もし、自分の意見や考えに見当違いなことや間違ったことがあることに気付いたときには訂正すれば良いのです。そうやって見識を高めていくのです。そういうことなので、会員のみなさんには日頃考えていることをどんどん積極的に投稿してください。安曇の古代史研究においては、史料不足のために明確な根拠を持って論じることは困難であり、推論に頼らざるを得ません。それゆえ、少ない情報をいかに適正に解釈しそして合理的に推論するかということが課題です。歴史を考える場合、歴史空間というものを念頭に入れておくことが基本です。歴史事情は九州地域、奈良地域、安曇平などの地理的広がりを持った空間の中で、そして弥生時代、古墳時代などという時系列のある時代軸空間の中の出来事です。安曇族の移動や経歴に関する情報を得た場合、その情報が歴史空間のどの位置にあるのかを認識した上で、合理的に論理展開することが必要です。多くの場合この認識が欠けているために、地域的な差異を無視したり、何百年もの時代差異を無視したりする例が多くあります。そのようなことを避けるためにも全国各地に広く分布する安曇族ゆかりの地との情報交換を進め、比較研究することは大変有効なことだと考えます。私は昨年ゆかりの地を何箇所か訪ねました。そこには熱心に安曇族の跡を辿っている方々がいましたが、少人数であること、また随分と昔のことであり痕跡が薄いことのために孤軍奮闘という状況でした。多くのゆかりの地が集まって、連携して取り組むことの必要性を強く感じました。私たちは安曇の歴史を勉強していますが、それが安曇野市の発展に少しでも貢献することが出来れば、素晴らしいことです。来年秋には全国の安曇族ゆかりの地から安曇野市に集まって交流会を開こうという気運が盛り上がりつつあります。それを安曇野市全体の動きに広げることが望まれます。どのように具体化するのかについて活発な論議を進めましょう。（会長）

いつから“安曇野”と呼ばれたか ……本郷 敏行

2006年に発刊された『安曇野大紀行』（信州の大紀行シリーズ①）の中で編集者の田中欣一氏は「“安曇”にはロマンさえ漂う快い響きがある。語感が何ともすばらしい。安曇地方にとって最高の文化遺産は安曇という地名そのものであろうと思う」と讃えている。今私達は、安曇の語を市名に冠して安曇野市としているがそれは当然とも云える。安曇は私達の血となり肉となっているからである。だが、私達は戦後の一時期までは安曇平と呼んでいたと思う。そこでいつから“アヅミノ”と呼ばれたかつい知りたくなるのが人情というものであろう。世の中同じ想いの人はいるものである。平成21年5月発行の臼井吉見文学館友の会だより“常念とれんげ”の第８号にあったのである。温明小学校の校歌に安曇野の三文字があったと記す。作詞は三郷出身の哲学者務台理作で昭和13年作とある。さらに理作は昭和35年に三郷小・中学校、豊科中学校の校歌の中に安曇野を入れて作詞していると続く。（市内には他にも哲学者や俳人の詩碑や句碑が豊科教育会館・穂高神社にもあるという。）昭和６年の下堀紅葉会選集にも一首あり安曇野の呼称は昭和初年には既にあったと言えるとしている。当地ではそういうことであろうが文献史上は明治39年吉江喬松（弧雁）の紀行文「木曽御岳の両面」の中にあるのが最初とされる（小林俊樹、信毎タウン情報展望台）。弧雁は塩尻市出身で早大仏文科の創設者といわれる。我が国の高原文学の先駆と郷土史研究家中島博昭さんが「犀川を溯る」で述べている。昭和29年には尾崎喜八が詩集「安曇野」を発表。そして昭和39年ご存知臼井吉見の「安曇野」である。これによって安曇野が広く世にひろまったことはいうまでもない。「安曇の文化伝統において、その古さと文化的価値の頂点にある安曇そのものから受けた恩恵は計り知れない」とは田中氏の言である。

今我々は安曇人として安曇野の大地に刻まれた歴史を探ろうとしている。安曇野は悠久のロマンである。（尚、本稿校正中に細川修さんからご指摘いただいた、大正８年創立の南農の校歌にも「安曇野」が登場する。作詞は高野辰如博士である。博士は中野市に記念館があり、南農の問い合せで校歌は昭和4年2月の作と判明した。）

また、「安曇野文芸」18号では、平凡社刊の「長野県の地名」に“松本盆地は安曇野・筑摩野といわれ…”と紹介し、続いて原田伴彦（歴史学者）は「梓川を境に北が安曇野」と述べていると記している。（編集委員長）

第4回総会報告

本会の第4回目となる平成21年度定時総会は去る4月25日午後1時から穂高の市民活動センター(くるりん広場)大会議室で行われました。

会長は、挨拶で他県の安曇氏族研究グループの活動に触れ、文献資料の少ない古代について、他のグループとの交流の必要性を強調しました。

総会では、事業報告、会計報告が承認され、22年度の事業計画、予算も承認されました。今年度事業計画では、勉強会に会員の意見発表と討論会を多く取り入れること、現地見学会を引き続き行うこと、安曇氏族ゆかりの地との連携を強化すること、などが決まりました。特に他地域との交流については、当会が中心的役割を担っていることから広く市民への呼びかけ、市当局への働きかけを強くすることも確認されました。

平成22年度事業予算

収入の部

科　目	金　額	摘　　要
年会費	200,000	160×1000 他
繰越金	27,221	前年より
計	227,221	

支出の部

科　目	金　額	摘要
事務費	40,000	消耗品etc
通信費	90,000	
学習費	32,000	講師謝礼・会場費
材料費	30,000	CD-P他
印刷費	34,000	コピー代
繰越金	1,262	
計	227,221	

第10回勉強会同時開催　穂高神社について学ぶ

総会に引き続き、「穂高神社について」(小平弘起宮司)と「安曇の歴史と穂高神社」(会員：山崎佐喜治さん)の話を聞きました。宮司は安曇之祖神といわれている神社に祀られている神々について古事記や日本書紀では、どうとらえているかについて解説されました。

穂高神社の本殿と祭神は、中殿:穂高見命、左殿:綿津見命、右殿:ニニギ命、であることと神々の由来。

また、遷宮祭の起源、遷座のきまり等について話されました。山崎さんは、安曇族の安曇への定着の年代の想定から神社の変遷について解説。「歴史についてはいろいろな説がある。それを認めあうことから真実説を目指そう」と結びました。その後、神社参拝を行い貴重な文献資料(「三宮穂高社御造宮定日記」のうちの一巻)に接することが出来ました。

県「元気づくり支援金」決定！

長野県の支援金が決定しました。総額207万円余で、主に交流会関係費として認められました。来年の「あづみ・しかネット」全国交流会に向けて本年は、渥美、安曇川、太子町、下関、志賀島との交流会開催に取り組みます。安曇族について他地域ではどのような研究がされているか情報交換して安曇族への認識を共有しようとするものです。交流事業について申請をしましたので早急に予算化して交流会計画の立案に着手します。

確かな知識と情報をお届けします。
社団法人 長野県宅地建物取引業協会 会員・社団法人 全国宅地建物取引業保証協会 会員
塚田不動産株式会社
〒399-8204 長野県安曇野市豊科高家1071-42　TEL0263-72-7111(代)FAX0263-72-6733

安曇氏と信濃国安曇部氏（史料にみる安曇）

浅川 隆

■安曇氏

安曇の起源は海と密接な関係があり、安曇氏が海人族であることを示す記述が『日本書紀』応神天皇3年11月条に次のようにあります。処々の海人が騒いだので、阿曇連の祖、大浜宿禰が鎮圧した。そのために彼は海人の宰に任じられたというものです。『新撰姓氏録』では、安曇氏諸系の出自を次のように記載しています。

◇安曇宿禰（右京神別）
「海神綿積豊玉彦神の子、穂高見命の後なり」

◇安曇連（河内国神別）
「綿積神命の児、穂高見命の後なり」

◇安曇連（未定雑姓河内国）
「于都斯奈賀命の後なり」

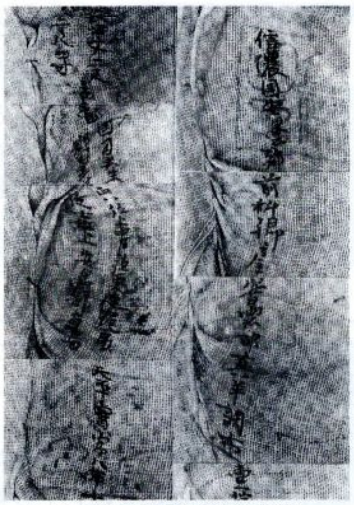
このようなことから、安曇氏は古くから海人の統率氏族として、または伴造として大和朝廷に仕えてきたとされています。特に朝鮮出兵に当たっては安曇連比羅夫の活躍が目立つ。しかし安曇氏は順風の時ばかりではなく、履中天皇の時、安曇連浜子は、住吉仲皇子の叛乱に加わったことによりその後表れない時期があったり、後世になって職掌のことで他氏と争い没落してしまったともいわれています。大化改新前の氏姓制の時期から有力氏族に数えられる雄族であったようです。

●安曇部真羊と安曇部百鳥

正倉院に残されている麻の袴布に墨書銘があります。

この袴布は天平宝字八年（764）十月に信濃国安曇郡前科郷から調布として奈良の都へ貢上されたものです。

安曇郡の名は、安曇氏の関連から生じた地名と考えます。それは、安曇部真羊・安曇部百鳥という部民の存在によります。「安曇部真羊」と郡司の主帳であった「安曇部百鳥」の先祖は、すでに五世紀末から六世紀の初めにはこの地に住んでいました。中央の安曇連氏がここに「部」を設定したので、その部民とされてしまったと考えられます。特に百鳥は郡司の家柄であり、部の設定以前はこの地域の首長でした。部の設定後は、中央の安曇連氏から管理を委された伴造の出身です。さらに遡れば国造の系累であると考えられ在地の名族でした。真羊の戸主は、大家族制の郷戸のことで、戸内の人数は30～40人はいたと思われます。



▲正倉院御物袴布墨書銘（正倉院御物）

袴布「信濃国安曇郡前科郷戸主安曇部真羊
調布壹端　長四丈二尺広二尺五寸」
主当 国司　史生正八位上　中臣殖栗連楫取
郡司　主帳従七位上　安曇部百鳥
天平宝字八年十月（信濃国印）

▲正倉院御物袴布墨書銘の内容

●連氏・宿禰氏・氏・部氏

「阿曇連氏」「安曇宿禰氏」「安曇氏」「安曇部氏」で連氏と宿禰氏は中央において大和王権後の大和朝廷に仕えていた氏で、始めのうちは伴造として、律令制下においては中央の官人として朝廷にあった。日本書紀には、阿曇連浜子が淡路の野島の海人を率いて仲皇子の謀反に加わり捕えられ、死刑に処せられるところであったが、これを免じられて、入れ墨をされたと書かれています。この話からも海人の統率氏族であり、皇子と共謀して叛逆を試みる程の有力な氏族であったと思われます。

阿曇連百足は孝徳天皇の命により播磨国石海の野を開拓したことが『播磨国風土記』書かれています。さらに、『肥前国風土記』には景行天皇が西国巡幸の折、阿曇連百足が随行し、小近島で土蜘蛛大耳を捕え、彼を殺そうとしたが、大耳は自分の罪を認め、許してくださるなら、贄を作って末永く献るといい、長蛇・鞭蛇・短蛇・陰蛇・羽割蛇を作り御所に献ったので許された話があります。この二つの阿曇百足の話は、開拓者・天皇の随従者として、天皇と彼は近い位置にあり、有力氏族であったことを示しています。

時代が下がって奈良時代、安曇宿禰氏と高橋氏が内膳奉膳で、どちらが先に立って奉仕するかで争った。その後も

中国・朝鮮半島／倭・大和／阿

588　法興寺（飛鳥寺）建立（596完成）
589　隨、中国統一
592　崇峻天皇殺害される　推古天皇即位
593　聖徳太子摂政となる
594　仏教興隆の詔
600　隨に使節を送る
601　聖徳太子斑鳩宮を造る（605に移る）
この頃、矢原・白金中心に大集落が造られる
603　冠位十二階制定
604　十七条憲法制定
607　小野妹子遣隋使として派遣　法隆寺創建
618　隨が滅び、唐となる
622　聖徳太子没する
629　舒明天皇即位
630　遣唐使を送る　飛鳥岡本宮に遷都
642　皇極天皇即位
643　飛鳥板蓋宮に遷都
蘇我入鹿、山背大兄王を滅ぼす
645　大化改新、孝徳天皇即位　難波に遷都
646　『科野国（信濃）成立、阿曇・筑摩など10郡成立
阿曇郡は高家・八原・前科・村上の四郷』
大化改新の詔
蘇我石川麻呂の変
653　飛鳥河辺行宮に遷都
655　皇極重祚、斉明天皇即位
658　有間皇子の変
660　百済滅亡
661　斉明天皇、朝倉橋広庭宮（九州）で没する
663　『白村江の戦い、日本と百済の連合軍大敗』
『穂高神社若宮に祀る、阿曇比羅夫連の活躍』
664　筑紫に水城をつくる
667　近江大津宮に遷都
668　天智天皇即位　近江令制定
670　初の本格的戸籍「庚午年籍」作製
671　天智天皇没する
672　壬申の乱　飛鳥浄御原宮に遷都
673　天武天皇即位
681　草壁皇子、立太子
686　天武天皇没する　大津皇子の変
689　浄御原令施行
690　持統天皇即位
694　藤原京に遷都
701　大宝律令完成
710　平城京に遷都
712　「古事記」完成
713　「好字制」科野は信濃に阿曇は安曇に「続日本紀」
諸国に「風土記」の作成を命ずる
718　養老律令選定
720　「日本書紀」完成、穂高神社関連記事
729　長屋王の変
752　東大寺大仏開眼
764　恵美押勝の乱
『安曇郡前科郷安曇部真羊調布を献ずる』
769　宇佐八幡神託事件
784　長岡京に遷都
794　平安京に遷都
801　征夷大将軍坂上田村麻呂、東北を制圧
804　『「新撰姓氏録」編纂、穂高見命関連記事』
859　『穂高神社従五位上授かる』
866　応天門の変
901　菅原道真、失脚し太宰府へ左遷
939　平将門、藤原純友の乱（承平・天慶の乱）
969　安和の変

長くこの争いが続き、延暦11年(792)には、安曇宿禰継成は不満を持ち神事に奉仕しなかったことにより遠流となり史上から消えました。これにより、奈良時代に安曇宿禰氏は内廷で奉膳の職を司っていたことがわかります。

阿曇連氏と阿曇宿禰氏は同族で天武賜姓によって、連姓から宿禰姓に変わったものであり、時代を遡って氏姓制のころ、あるいはもっと前大和王権の形成期に、王権と密接に結びつき活動した氏族であったと推測されています。

阿曇連氏・安曇宿禰氏と信濃国安曇郡の安曇部氏とはどんな関係にあったのでしょうか。

大化改新(645)以前の氏姓制のころは朝廷を始めとして、皇室・有力豪族は私有民を持っていました。この私有民のことを「部」(ベ・トモ)といいます。部民の始めのころは、専門とする職掌によって朝廷に仕えていました。身分は高くなく、農奴的な見方と普通の良民とする見方もあり明確ではありません。部民の起源は鍛冶・馬飼・服部などのような特殊技術を持った渡来系の人々が、その技術をもって朝廷に仕えたことに始まります。この部民制度は大和朝廷の支配地域が拡大するに伴いその後しだいに部民の数は増加します。そして渡来系の特殊技能集団だけでなく、一般の農業にいたるまで、さまざまな形で種々の職業の仲にも波及して『日本書紀』には百八十部と書かれた程です。

●安曇部の誕生

部の制度は概ね五世紀に成立したと考えられ、特に五世紀末から六世紀にかけて最盛であり、大和朝廷(王権)の支配地域の拡大と密接な関係にあります。特に信濃などの東国では、皇后・皇子の名をつけた小代(こしろ)・名代(なしろ)が続々と設けられ、大和朝廷が隆盛になるのを支えました。

初期には特殊技能を持つ渡来系氏族に限られていた部民の制度が一般農民にまで及ぶようになりました。

これらの部を統率する中央の豪族は「連」という「姓(かばね)」が大部分でした。連は、大和朝廷創業期に譜代の関係にあった氏族に与えられる姓であり、安曇氏も「連」氏でした。朝廷を始め各豪族は、経済基盤を充実させるため部の設定に力を注ぎ、大化改新直前には、豪族間で部の争奪が盛んに行われ、力の強い氏族は益々強大になりました。そして豪族と皇室との間にも対立関係が生じるようになり大化改新が起こる状況にまでなりました。

●安曇連氏と安曇部氏

安曇氏は中央の大豪族であり、連という姓で大和朝廷の創業期から主従関係にあった氏族です。安曇連氏は天武賜姓で宿禰という姓を賜り安曇宿禰氏となり、長い間数系に別れそれぞれの地で繁栄しました。

さて、安曇氏は始めの頃は海人を統率し、次第に海以外の生産活動である農業に従事する「部」を全国各地に設定するようになりました。これは安曇氏に限らず、中臣氏・忌部氏・土師氏・大伴氏・物部氏など大豪族に共通した動きです。このことは史料・地名などを通して知ることができます。

信濃国安曇郡は安曇氏によって安曇部が設定され、この地に住む人々と土地を安曇氏が私有するようになったと考えられています。信濃国安曇郡に部を設定した安曇連氏は、どのように地域を支配統率したのでしょう。中央から管理人が派遣されたかどうかは不明です。必要に応じて中央からの派遣や行き来はあったと思われますが、以前から安曇地方を支配してきた在地の首長に管理を任せたのではないかと考えられています。大和朝廷の支配方式がすべてこの方法であり、在来の支配関係を尊重し穏便に間接支配をする方が統治し易いといえます。「部」を統率する伴造(ともみやっこ)に土豪をあて、土地の生産物は中央にいる安曇連氏に納め、さらにその中から一部朝廷へ貢上されたと考えられます。部は血統ではなく、勢力関係によって支配者と被支配者の関係にありました。それまでの地域の支配者であった首長も含めて農民まで一括して安曇部に入れられ、それまで信仰してきた神に代わり、安曇連氏の神が祀られるようになりました。穂高神社の祭神は安曇連氏の奉じる神で、西方一帯には古墳群があることから神社周辺が安曇郡の中心であったと思われます。信濃国安曇郡といわれる範囲は明確ではありませんが南北安曇と考えることができます。(事務局次長)

◆本文は、「信濃古代史の中の人々 松崎岩夫 信濃文化研究所」の安曇関係部分を参考に安曇関連の史料と参考文献から補足をしたものです。

【参考文献】歴代天皇辞典・高森明勅・PHP研究所／歴史から見た日本文明・高森明勅・展転社／穂高町誌／堀金村誌／日本史概説 森克己 竹内理三 編 塙書房／大和朝廷古代王権の成立・上田正昭・講談社学術文庫／新釈日本史この国のはじめ・邦光史郎・徳間文庫／長野県の歴史・古川貞雄・福島正樹・井原今朝男・青木歳幸・小平千文・山川出版社／国民の歴史・西尾幹二・産経新聞社／日本古代国家の成立・直木孝次郎

・安曇　古代史千年の流れ

57	倭奴国王、後漢に使節を送る
150頃	光武帝より印綬を授かる
185頃	出雲王国統一
220	邪馬台国による統治（卑弥呼が女王となる）
226	後漢滅亡　魏建国（中国）
239	魏で明帝が即位（中国）
	邪馬台国の卑弥呼、魏に使節を送り、魏の明帝より親魏倭王の金印を授かる
263	魏、蜀を滅ぼす（中国）
265	魏滅亡、西晋建国（中国）
266	倭女王・臺与、西晋に使節　古墳文化おこる
280	西晋、呉を滅ぼし中国統一（中国）
304	五胡十六国の乱始まる（中国）
313	高句麗、楽浪郡・帯方郡を滅ぼす（朝鮮）
316	西晋滅亡（中国）
318	東晋建国（中国）
337	前燕王国建国（中国）
346	近肖古王、百済建国（朝鮮）
356	奈勿王、新羅建国（朝鮮）
369	倭軍、朝鮮半島出兵、任那（加耶）を領有
371	高句麗故国原王殺される（朝鮮）
372	百済王、倭に七支刀を贈る（朝鮮）
391	高句麗で広開土王即位（朝鮮）
	倭軍、百済・新羅に出兵高句麗と戦う
400	高句麗、新羅で倭軍を破り任那に入る（朝鮮）
404	倭軍、帯方郡に侵入、広開土王と戦い敗退
407	倭軍、高句麗軍と戦う
412	高句麗広開土王没する、長寿王即位（朝鮮）
413	倭と高句麗が東晋に貢物
420	東晋滅亡、宋建国（南宋）（中国）
421	倭王・讃が宋に朝貢
438	倭王・珍が宋に遣使して上奏文を奉じる
439	北魏が華北を統一（北朝）
443	倭王・済が宋に遣使
462	倭の皇太子・興が宋に遣使
478	倭国王・武が宋に遣使
	この頃、子代・名代の設定が始まる
479	南宋滅亡、南斉建国（中国）
507	継体天皇、河内国樟葉宮で即位
511	山城国筒城に遷都
512	百済に任那四県を与える
527	磐井の乱おこる
534	安閑天皇が都を大和国勾金橋に移す
	この頃、各地に屯倉を置く
535	宣化天皇即位
536	檜隈の廬入野に遷都
537	蘇我氏、大臣となる
538	仏教伝来
539	欽明天皇即位
540	磯城嶋金刺宮に遷都
547	百済、対高句麗戦支援を倭に要請
554	百済に救援軍派遣
562	任那、新羅に滅ぼされる
570	『この頃、製鉄技術・馬飼い技術をもった阿曇氏が科野のこの地を私有、梓川・高瀬川沿岸、烏川・中房川の扇状地開発を始める』
	穂高西山山麓に群集墳が築かれ始める
572	敏達天皇即位　大井宮造営
577	私部を置く
585	用明天皇即位　池辺双槻宮に移る
587	穴穂部皇子殺害される　物部氏滅亡

安曇誕生の系譜を探る会に参加して

宗像 章

昨年よりお誘いを戴いて会に参加させていただいております。合併により「安曇野市」が誕生しまして５年が経ち、我々が常に念じていた安曇野市→安曇平→安曇族→安曇氏という一連の思いが繋がったように感じられます。

人、誰でも自分の出自には思いがあり、遠くを見るときには心の一部にこの故郷帰りが浮かんできているかと思います。そんな中でこの会に接することが出来たことは、私の今までに感じていた思いを託し一緒に勉強できる機会を得られた。何かの縁と思い、今後一緒に勉強をさせていただきたいと思っております。

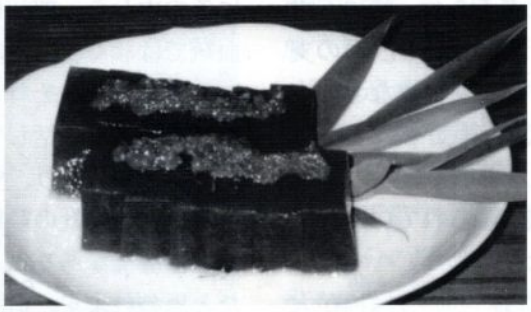
私事で恐縮ですが「宗像」という氏を戴いており、我が家の実家にある古文書により出自は九州志賀島の北東約26kmの所にあります宗像市田島の宗像大社の代々の宮司を祖としている事に始まります（天元2年（979）初代清志氏より天元14年（1586）80代氏貞まで）。神社の記録では、6世紀の記録に神功皇后の新羅の役に宗像大神「神助を加え給う」との記載があります。

従って安曇族の北方進出と同時代に関わりを持っていたのでは？と云う関心があります。細部の歴史については、論じられませんが、とても他人事とは思えないものを感じつつ参加するに至りました。安曇族の歴史を考えることは「自分史の中にある物語」を実感出来る機会として、今後とも出来るだけ参加して行きたいと思っております。よろしくお願い致します。（会員）

安曇族こぼれ話―②　「イゴ」の来た道

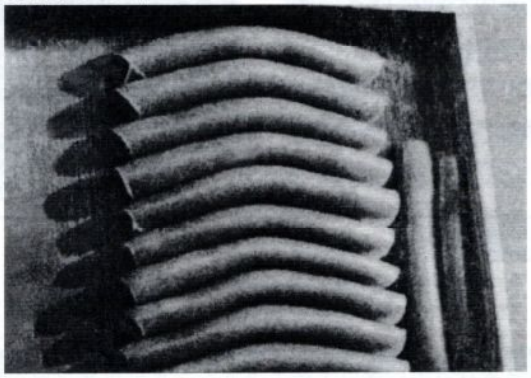
細川 修

信州でも北信地方、中信の大町・北安曇・南安曇の一部で、お盆やお庚申・祭礼などハレの日に欠かすことのできない海の幸が「イゴ（エゴ）」。主に日本海沿岸でとれる、茶褐色で糸くずのような海藻・カラクサイギス（イギス科）で作る。最近、松本市で話をした折に「イゴ」を食べるかどうか聞いてみた。するとやはりほとんどの人は、これに関心がない。



安曇野の「イゴ」

「大正時代の郷土史の書物には、エゴは南安曇穂高町の大門以北の地方に限り食用するとある」（田中磐『しなの植物誌』）というが、この食性はその後南へ動きつつあるものの、今だ梓川の北岸の地域までで、松本市には到っていない。移動の道が、梓川の流れにはばまれたかたちである。「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川…」を思い起こさせる、文化伝播の現実が面白い。



博多名物「オキュウト」

盆が近くなると各家々では、行商人やボッカの背で運ばれてくる、カラカラの乾燥したイゴ草を買って、水をつけたまま天日にさらして漂白する。二日ほどさらしたところで煮溶かして、冷やし固めてできあがり。

それをちょうど羊かんのように切って神仏に供え、お下がりをいただくのだが、寒天よせかこんにゃくに似て、口当たりがなめらか。海の匂いが残ってさっぱりとした食品だ。どこか、遠い昔この地を拓いたという「安曇族」の、海へのあこがれを感じさせるような風味がする。日本海沿岸の秋田県や新潟県などで古くから珍重されていた食習慣が、山国信州のひだ深くまで運び込まれたものという。「安曇族」のルーツを知りたくて訪ねた北九州の志賀島で数年前、「イゴ」に出会えてびっくり。

ここでは「オキュウト」と呼んでいるが、まさしく中身は同じもの。「地球温暖化のためかねえ、イゴノリがめっきり採れなくなった。オキュウトにもトコロテンなど混ぜ物をしています…」とは昨秋は島人から聞いた残念な話だ。

安曇族について多方面に研究されて造詣の深い信州大学名誉教授・坂本博先生は、「エゴの移入ルートと安曇族信濃入りのルートは間違いなく一致する」（『信濃安曇族の謎を追う』）と明言しておられるが、イゴの食性はやはり1500年近くも昔北九州から海のハイウェイ・黒潮に乗って北上し安曇野に至ったといわれる、遠い先祖「安曇族」が携えてきた海の文化のように思える。神仏への宗教性も含み持って使われるイゴのあり方の解明が、安曇族は「なぜ」「いつ」「どこから」この盆地に入ったのかという興味ある三つの疑問に、重要なヒントを与えてくれそうな気がしている。（副会長）

志賀海神社 山ほめ祭から阿曇族を考える

米倉 忠平

昨年10月我が会から九州志賀島の歴史シンポに参加した。島の歴史研究会が主催するもので「古代海人阿曇族の全国進出」がテーマであった。我々がテーマとする安曇野にも進出したとされる安曇氏族とはどういう氏族か、私は一つの仮説をもって参加し志賀海神社宮司阿曇氏からその一端を確認することが出来た。（氏は、その後数日を経ずして急逝された。人の世の無情さを痛感した次第である。ご冥福をお祈りする次第である。合掌。）

私の仮説とは、多くの学者・研究者たちの話から推論するものである。志賀海神社には山ほめ祭という祭りがあり、そこでは「君が代」が歌われる。その「君が代」とは北九州の歌であり九州の大君を讃える歌である。ということは九州に王朝が存在し、やがて別の勢力に追われ安曇の地へ逃亡してきたのではないか。しかしこの地でも時を移して近畿王朝勢力に討伐されて今なお残骸をとどめるというものである。では、祭りはどのようなものか、先ずは「大祓の祝詞」が奏上される。今に伝わるものであり敵味方を共に祀ろうという大事な意味を持つ。次が「八乙女の舞」である。八乙女とはいうもののみんな老女であり、舞うというより回るだけといったものである。続いて「闇のお祭り」である。5摂社の一つである今宮社の祭りでここは阿曇磯良等を祀っている。やがて祭りは、「山ほめ祭」に入る。すべて村人たちが演ずるそうである。「あれはやあれこそは我が君のめしのみるねかや」と述べる。別の一人が「君が代は千代に八千代に…」と続ける。今我々が歌う曲とは全く違う、歌というよりは唱えるといったものだという。歌詞は、我が君が現県庁所在地付近の千代から来るという意味になるという。前原市には、細石神社があり神社近くには井原遺跡がある。井原は「イハラ」と発音され巨石、神石のあったところでイワオに通づる。さらに西方にある桜谷神社の祭神は苔牟須売神である。このように「君が代」には北九州の地名、神社名などがすべてあてはまるのであり筑紫の歌である。つまるところ我が君は筑紫の大君であり九州王朝の中心王者の歌であろうということになる。九州王朝は、その後唐の侵略に備え都を筑後へ移し八女の大王となった。詳しくは別の機会に譲ることにしてこの氏族が九州から信濃の中央高地に移り阿曇氏族の大君となったのではということである。筑後からの移動説は高良山高良玉垂宮で説明できる。九州久留米周辺に数多く祀られているが当地にもたくさん見られるのである。八女の大王はその後近畿王朝に追手をかけられ攻め滅ぼされたわけである。その埋葬地が魏石鬼岩窟といわれる。現在のところ九州王朝は歴史上「記紀」には存在しないが日本の歴史は私達が理解しているものより深く遠く悠遠だったのではないか。

神話や神社伝承などがいかに深く鋭く民族の歴史の真実を重層的に保存してきたか、改めて考えてみなければならないと思う。（会員）

※おことわり：志賀海神社の祭りについては、一部編集委員において付け加えさせていただきました。

志賀島の金印は何と読むか

志賀島歴史シンポ・大谷光男名誉教授の新説

去る2009年10月に行われた志賀島歴史シンポジウムでの大谷名誉教授（二松学舎大学）は、基調講演で金印「漢委奴国王」の解釈について新説を発表されたとのことである（歴史研究会：志賀島だより）。我々は、今まで「漢（かん）の委（わ）の奴（な）の国王」と教えられてきた。市内某酒場でも店名に「わのなの」と使っているほどである。この読み方は諸説あり10指を数えるという。代表的なものは、委奴国をイトコク（伊都国）とするもの（久米雅雄・大阪府教委）、ワ（委＝倭）のナコク（奴国）とするもの（高倉洋彰・西南大教授）等である。これらに対し大谷教授は「漢のヤマト」と読んだのである。教授は理由として金印には紫綬がついていた。紫綬は大国の王に授けるものである。よって委奴国は大国か連合国家でなくてはならない。故に倭国王に贈られたものであり「ヤマトの国王」と読むべきである。というものである。シンポ会場には衝撃が走ったそうである。確かにこれは、日本の古代史のいくつかの論争に与える影響は大であろう。この時代に強力な王権が存在したことになり、その波紋はどうなることか。視点を変えれば、これらの諸説はやや現代的でありはしないかという疑問がわく。事件捜査のように現場にもどる、つまり出来るだけ古代人の世界に近づこうという立場でみなければならないと思うのである。ここに一つの説を借用する。当時日本列島には朝鮮半島から多くの加羅族（伽耶族）が移動してきて筑紫倭、多羅国、狗奴国、大和倭などの倭国を建て、後に大和倭を中心として今に至る日本国をつくった。九州の加羅系の国である「奴（カヤ）国＝倭奴国」が九州内加羅系諸国の中心となるや、狗奴国（クカラカヤコク）と称した。この説は、比較的言語学の立場から、倭とは6世紀以前は南韓にあった伽耶諸国のことであったとする姜吉云・倭の正体より引用。

1784年（天明4）志賀島で発見された金印。

安曇の歴史と穂高神社ー①

山崎 佐喜治

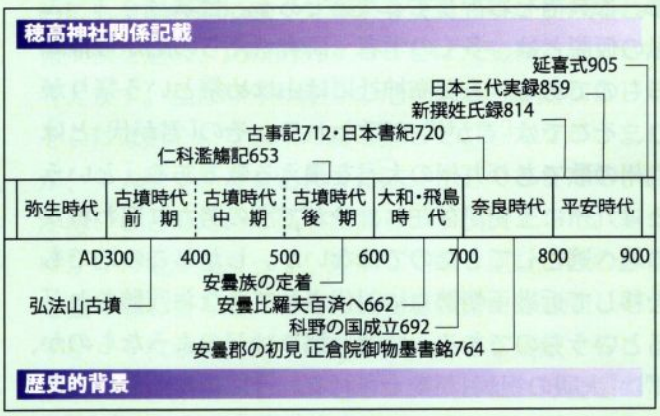
穂高神社の西部に6世紀後半から7世紀前半に造られた古墳が多い。これから安曇族定着を6世紀中頃(560年代)と想定すれば、定着後、間もなく祖神としての神社が出来てもおかしくない。

それを穂高神社としたかは分からないが、安曇族の祖神を祀った原始穂高神社が考えられる。

文献による穂高神社の最も古い記録は859年(貞観(じょうがん)元年・清和天皇)『日本三代実録』で、縦五位下から縦五位上に格上げされた記録がある(現地創建かは不明)。

※穂高見命を祀ったものを初めての穂高神社と見なす。

『新撰姓氏録』祖神・穂高見命祭祀の記録814年(弘仁(こうにん)5年)(現地か不明)。古事記712年(和銅5年)綿津見命の子・宇津志日金拆命(穂高見命)とのみ。日本書紀720年(養老4年)ワタツミ三神の記載のみ。一説に大海人皇子(おおあまのおうじ)(天武天皇)が653年(白雉(はくち)4年)に創建した。(仁科濫觴記(らんしょうき)からの巻山哲雄氏説:塩尻市在住)。穂高見は天武天皇の叔父に当たる。なお「仁科濫觴記」の「濫觴」は始まり、起源の意。『安曇の古代』仁科宗一郎著に詳しい。これによれば、「穂高神社の創立は孝徳天皇白雉4年である。(前後中略)穂高見命は、綿津見命の子、宇都志日金拆命の子孫である事は古事記に見えているが、濫觴記に従えば、穂高見熱躬の子孫達が保高神社を穂高見熱躬の舎跡に建てたのが始まりである」と。(天神・天孫・地祇(ちぎ)のうち、熱躬という地祇を合祀したともとれる)。延喜式927年(延長5年)では諏訪大社、生島足島神社と共に全国285社に列し、朝廷から奉幣を受ける大社とされた。(会員)【次号に続く】



編集後記　「安曇人」について一言

安曇人第2号をお届けいたします。まだまだご満足いただけるようなものではありませんが、これから鋭意内容の充実を図って参ります。私達は誰でも自分の出自に強い関心を持っています。会員の皆さんもこの会に入る動機は安曇(野)のルーツは?だったのではないでしょうか。安曇の歴史はつい安曇族の歴史におき替えられてしまいます。呼び慣れた安曇族でもよいのですが、歴史を学ぶ上では問題もあると郷土の研究者から指摘されています。この会報も当初は安曇族という呼び方を使おうと考えましたが、思いとどまりました。安曇の歴史は一氏族だけでつくられたものではないと考えたからです。先住の人々もいたことでしょう。信州のまほろばの地であったこの地には多くの人々が移入してきたことでしょう。その中の一時期の統治者が安曇氏族であったとしても、この地の歴史はそれだけでは語れません。「歴史は文献資料に基づいて構成されるものであり、時間がたてばたつほど、文献が蓄積すればするほど新たな見直しが必要になり、論理にかなった修正を加えることが出来るのでよりよく現実を反映するといえる」とある学者は言っています。私達が会報を「安曇人」としたのは過去ばかりでなく現在のこの地に生きる人々の姿も視野に入れて歴史を見つめたいからです。私達は何万年何十万年かの日本列島と、この地の人びとと社会の歩みを見なければなりません。つまり人類史の中の安曇を見なければならないのではないでしょうか。「安曇人」とした所以です。これからも「安曇人」をよろしく。　(編集委員長:本郷敏行)

事務局だより

◆くるりん広場日直当番『毎月最終土曜日:午前9時〜午後5時』

市民活動センター「くるりん広場」の日直当番は、最低月1回が義務づけられています。毎月最終土曜日、午前9時〜午後5時の間で半日単位で都合のつく方は、事務局次長浅川隆までご連絡ください。(☎090-3143-7081)

◆年会費 1,000円 納入のお願い。

現在83名の会員から納入がありました。未納の方は事務局まで納入いただくか、郵便振替でお願いします。

《ゆうちょ銀行口座番号:00570-1-6031/安曇誕生の系譜を探る会》

◆新手の振り込めサギにご注意を!

勉強会などの活動者を対象に、出版や雑誌掲載という魅力的なネタでお金を振り込めという手口のサギです。一切応じないように!!
出版社やマスコミを語るような接触が有った場合、仲間や事務局にご相談ください。

安曇誕生の系譜を探る会
会報発行:平成22年6月5日　事務局長 金井 透
〒399-8101 長野県安曇野市三郷明盛1078-1 Tel.0263-77-2803
URL:www.azumitanjoh.or.jp E-mail:tooru.kanai@ab.wakwak.com

安曇之祖神 穂高神社
安曇野市穂高6079 電話 0263-82-2003 http://www.hotakajinja.com
穂高人形飾物と道祖神展
資料館 御船会館 電話 0263-82-7310